

九鍼派

急証治療（急性熱病、痺証など）

五藏派

藏象的治療（≡中医学）

経脈派

経脈疏通治療

経筋派

痺証治療

その他

気血水の治療

九鍼十二原篇

- (1) 小鍼による補写
- (2) 九鍼
- (3) 十二原穴

(1) 急性熱病を、小鍼を使って治療ができるようになった（ごく初期、あるいは緩解期なら、小鍼がよく適応する）。その治療を「迎追の補写」という。

(2) 急性熱病・急症の治療は、九鍼（鑱鍼・鋒鍼・鈹鍼・員利鍼）を使ってすでに存在していた。

(3) 原穴は、五藏・膏・肓の病気の始まり（源）を見つけるポイント・治療するポイントである。

【迎追の補写】

現在は、迎隨の補写というが、おそらく『難経』七十二難に「能知迎隨之氣」に基づいたものと思われる。九鍼十二原篇「迎而奪之、惡得無虚、追而濟之、惡得無実」を基準にして、迎・追を本字とすべき。

『全訳漢辞海』の意味

迎：迎え撃つ。迎えて連れてくる。「迎而奪之」迎えて勢力を奪う

追：後追いして手当てする。救う。「追而濟之」後追いして救済する

【補写】

補は本字。仮字として、「布」（馬王堆『天下至道談』）。

写は本字。仮字として「舍」（馬王堆『天下至道談』）、「瀉」（『難経』）。

【向かいあう・背中あわせ／後についていく・したがえる】

「其来不可逢、其往不可追」とある「逢」は仮字で、「迎」が本字。

「迎之隨之、以意和之」「補曰隨之」とある「隨」は仮字で、「追」が本字。

『素問』天元紀大論「其来可見、其往可追」とある「見」は仮字で、「迎」が本字。

【熱病について】

急性熱病（傷寒）⇔慢性非熱病（雑病）

①総論

『素問』熱病論・瘧論

『靈枢』逆順篇・刺節真邪篇

②こころがまえ（鍼道）

『靈枢』九鍼十二原篇（神・機・知逆順）

③具体的治療

『素問』刺熱篇・刺瘧論

『靈枢』熱病篇・刺節真邪篇

④熱病治療に使う鍼

鑱鍼・鋒鍼・鈹鍼・員利鍼

『靈枢』九鍼十二原篇

『素問』刺瘧論

『靈枢』熱病篇

⑤熱病治療に使う小鍼

『靈枢』九鍼十二原篇の迎追の補写

* 同僚篇：『靈枢』官能篇・邪客篇・刺節真邪篇

* 解釈篇：『素問』離合真邪論・八正神明論

〔小鍼による急性熱病の治療〕

九鍼十二原篇とりあげているのは「虚邪」と、防衛力の「真気」である。「虚邪」が侵襲して病勢が強い状態を「邪気勝」といい、虚邪の侵襲をまねいたのは「真気」の虚弱さであり、これを「気虚（真気虚）」という。

小鍼による迎追の補写は、急性熱病の治療である。

未盛期：迎（迎え撃つ）を行う。迎え撃つのは虚邪による盛んな病勢。写法ともいう。九鍼十二原篇「迎而奪之、悪得無虚」（迎え撃って勢力を奪えば、かならず虚してくる）

緩解期：追（後から手当てする・救う）を行う。手当てするのは真気。補法ともいう。九鍼十二原篇「追而濟之、悪得無実」（後追いして救済すれば、かならず実してくる）

〔小鍼の理由〕

未盛期（初発期）で早めならば小鍼でも治療可能。

已衰期（緩解期）はとくに慎重を要するので小鍼が最適。

⑥「邪氣」は以下の総称である

(1) 外邪 ①虚邪・正邪	急性熱病の邪氣
(2) 内邪 ①内生五邪 ②病理的産物（痰飲・瘀血） ③邪心	慢性非熱病の邪氣

⑦虚邪と真氣

『靈樞』刺節真邪篇

「真氣者、所受於天、与穀氣并而充身也」

(真氣は、天から受けたもので、穀氣とともに併走して、身に満ちている)

「正氣者、正風也、従一方来、非実風、又非虚風也」

(正氣は、正風の邪氣である。ある一方から吹いてくる。実風でも虚風でもない)

「正風者、其中人也浅、合而自去、其氣来柔弱、不能勝真氣、故自去」

(正風の邪氣が侵襲するのは浅く、渡り合っても自然に治る。正風の邪氣は弱いため、真氣に勝てないので、自然に治るのである)

「邪氣者、虚風之賊傷人也、其中人也深、不能自去」

(邪氣とは、人を損なう虚風である。その侵襲は深く、自然に治ることはない)

真氣：虚邪・正邪の侵入を防ぐ。穀氣（ここでは衛氣）と一緒にめぐっている。

虚邪（虚風の邪）：邪氣ともいう。(真氣が充実していても) 自然に治ることはないので、積極的な治療・対策が求められる。(cf 流行性感冒)

正邪（正風の邪）：正氣ともいう。真氣に勝てないので(真氣が充実すれば) 自然に治る。自然に治るので敢えての治療はいらない。(cf 普通感冒)

⑧真氣を弱める

外邪（虚邪・正邪）を防ぐのは衛氣＋真氣である。

衛氣は穀氣であり、経脈とともに循り、大表にあつては防衛の役割をする。

真氣は、『素問』上古天真論「恬憺虚無、真氣従之」からすれば、道家の考え方がとりいれられて、恬淡虚無であれば道の氣＝自然の氣がもたらされて（寄りつく・従）、衛氣のはたらきがより完全になるという意味と思われる。林克『『黄帝内経』における真氣について』によれば、「この真氣の存在する部位は、具体的記述からは分肉の間や皮膚の間が考えられ」という。

- ・衛氣の標準的な皮膚防衛
- ・真氣がもたらされれば、より強靱な皮膚防衛となる

蛇足を加えれば、

- ・恐れると（背筋が寒くなるというように）体表から衛氣が退く
- ・睡眠の過不足によって、衛氣のめぐりが悪くなる

などを考慮したものと思われる。

⑨急性熱病の4期

『靈枢』逆順篇に「上工刺其未生者也、其次刺其未盛者也、其次刺其已衰者也、下工刺其方襲者也」とある。

熱病の経過：未生期→未盛期→方襲期→已衰期

今風：潜伏期→初発期→最盛期→緩解期

治療でいえば：

上工＝未生期（潜伏期）

次工＝未盛期（初発期）

下工＝方襲期（最盛期）

次々工＝已衰期（緩解期）

(兆)	来期		往期
未生期	未盛期	方襲期	已衰期
潜伏期	初発期	最盛期	緩解期
①上工	②次工	④下工	③次々工

九鍼十二原篇「其来不可逢、其往不可追」

来期（方襲期）は（軽々しく）迎え撃ってはならない。迎が本字、逢は仮字。

往期（已衰期）は（深）追いしてはいけない。

九鍼十二原篇「往者为逆、来者为順」

往期（已衰期）は逆証である（から深追いしてはいけない）

来期（未盛期）は順証である（から早めに迎え撃つべし）

〔方襲期は手を出さない〕

『素問』瘧論「経言、無刺熇熇之熱、無刺渾渾之脉、無刺漉漉之汗、故为其病逆、未可治也」、

『靈枢』逆順篇「刺法曰、無刺熇熇之熱、無刺漉漉之汗、無刺渾渾之脉、無刺病与脉相逆者」

熇熇之熱：高熱

渾渾之脉：勢いが良い脈

漉漉之汗：流れる汗

病与脉相逆：病症と脈が合わない

⑩熱病治療に使うツボ

『素問』刺熱篇・水熱穴論

『靈枢』熱病篇

⑪cf 『素問』陰陽応象大論

其有邪者、漬形以為汗、(邪気が襲ったら、身体を漬けて発汗させる)

其在皮者、汗而發之、(邪気が皮位にあるなら、発汗させる)

其慄悍者、按而收之、(邪気がすばしこいなら、止めて収束させる)

其实者、散而寫之、(邪気の勢いが強いなら、散らして勢いをそぐ)

* 『靈枢』癰疽篇「則強飲厚衣坐於釜上、令汗出至足已」(クスリを強引に飲ませ、厚着して、釜上に座らせ、上半身の汗が足に至る所に癒える)